

東京国立博物館 建築資料館

建築資料と人の関係をデザインする

国立近代建築資料館の代替案

2013年5月、全国的な建築アーカイブシステムの構築を目的とした、文化庁による国立近代建築資料館が開館した。発足したばかりで規模も大きくないが、この施設の誕生した意味は大きい。もしこれが国立国会図書館のように膨大な資料を抱え、定期的に展示替えを行う恒久的な常設展示の場所であれば、訪れるたびに様々な観点で建築史に触れられるだろう。全国に眠る多くの建築資料に思いを巡らしながら、より一層意欲的な建築の資料館を提唱したい。



建築資料館、トーハクに建つ

国立近代建築資料館は早急な整備が課題であったことから、湯島旧岩崎邸に隣接する司法研修所の講堂をリノベーションして開館した。敷地としては大変魅力的であるが、立地としてはアクセスの面で条件が良いとはいえない。施設としての主な目的は「アーカイブズ (Archives)」であり、「博物館」や「美術館」といった Museum とは異なるものだが、建築の国民理解をより深めるためには、上野公園の東京国立博物館構内に計画されている方が建築分野の発信力が増すように思う。



かつての建築家との対話を

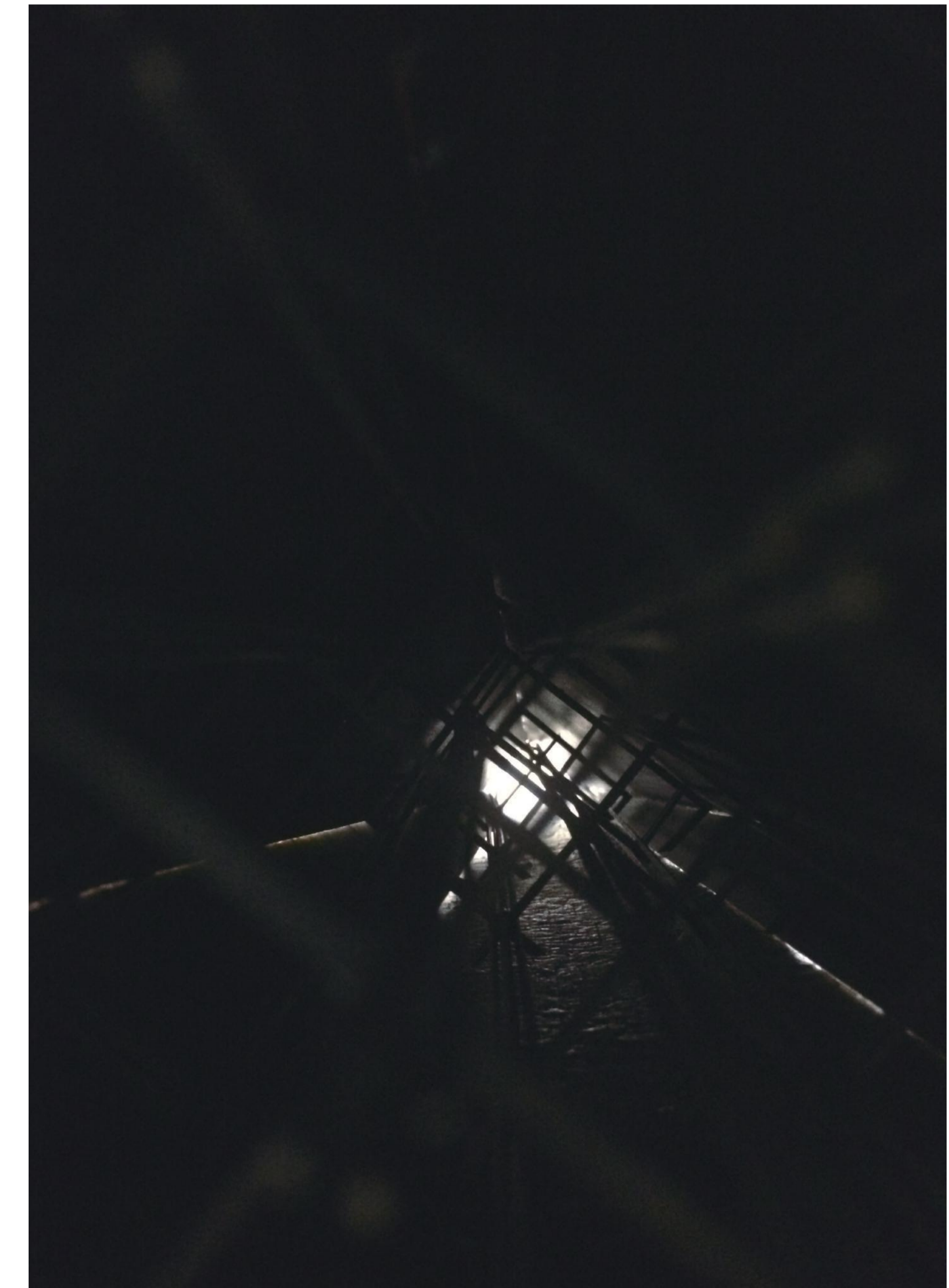
建築を表現した図面や模型は、アートとしての魅力を放つばかりではなく、貴重な建築資料としての役割を担っている。長期的アーカイブ施設として建築資料の収集と保存を行いながら、先人たちが自らの手で描いてきたドローイングに直接触れることはどれだけ幸せなことだろう。当時の建築家の思考や表現に思いを巡らすことのできるような建築として、さらに私の最近の関心である「日本らしさ」あふれる建築として、建築の資料館を設計する。



展示室／研究室



閲覧室へのシーケンス



建築資料閲覧室見上げ



「手で設計する」ということ

私はこれまでの設計演習において、3DやCGといったコンピュータによるスタディと表現に依存してきた。恥ずかしながら手で図面を引いたことがない。修士論文で建築資料の観点から建築史をみたことで、多くのドローイングに魅了され、建築を自身の手で練ることに関心が向いた。コンピュータを用いずに設計を行うことで、私の建築設計に変化が起きることを期待し、トレーシングペーパーと製図板、模型のみでスタディを進めた。ドローイングと呼ぶには単なる簡略な図面ではないが、私にとって一本の線を引く瞬間に起きる思考の存在を認識できた経験は、これから建築に携わるうえで「貴重な第一歩」となった。

